



柏原兵三

カールスパートにて
滞欧作品集

潮出版社

カールスバートにて／一九七二年五月二五日第一刷／著者 柏原兵三◎H. Kashiwabara 定価 二〇〇円
発行者 碓井昭雄／発行所 株式会社潮出版社 東京都新宿区南元町二四一／郵便番号 二〇／電話 三三三(三五)七二二(代)
本文・附物 図書印刷／製本・製函／牧製本 万一、落丁・乱丁本の場合はお取り替えます。

柏原兵三

カールスバートにて

装帧
山本美智代

目次

クラクフまで	5
バラトン湖	45
カールスバートにて	89
ヴァイマル行	123
再会	173
解説 西尾幹二	237

ク
ラ
ク
フ
ま
で

西ベルリンから東欧圏は意外に近い、というよりも西ベルリンは東欧圏の中にある、この分り切った事実が本当に納得出来るようになるまでにずい分時間がかかったのは、壁に目をつむってしまったえば西欧圏の大都市に違いない西ベルリンに住んでいて、私もまた壁に目をつむり、意識を絶えず西欧に向け、旅の計画といえば、フランスを、スイスを、イタリアをと考えていたからだろうか――。

西ベルリンに住みついてから十カ月近く経ったある日のことだった。テンペルホーフ空港に知人を送りに行った帰り、メーリングダム通りをぶらぶら歩いて、グナイゼナウ・シュトラッセにさしかかった時、交叉点の中央に立っている里程標が私の注意を惹きつけた。ケーニヒスベルクまで五百九十キロメートル、ダンツィヒまで四百七十キロメートル、ブレスラウまで三百三十キロメートル……。

この里程標はドイツ人の失われた故郷に対する郷愁を強く物語っている。そればかりか失地回復の願望さえ籠められているようである。――しかし私がその時まっさきに感じたのは

ベルリンからこれらの町が意外に近い距離にあるのだという驚きだった。迂闊な話だが私はそれまでベルリンからボンまでが六百二十二キロメートルあるのだったら、ベルリンからソヴィエトのケーニヒスベルクやポーランドのダンツィヒまでは少なくともその二倍位はあるに違いないと決めてかかっていたのである。

その日家に帰ってから、地図を開いてみてとくと私は得心したのだ、ベルリンは東欧圏の中にあるのだということを。ポーランドはもとより、チェコスロヴァキアも、ハンガリーもすぐ近くにあるということを。私は錯覚に陥っていたのだ。ポーランドも、チェコも、ハンガリーも、何かひどく遠いところにある国だという――。

この錯覚はしかしかならずしも誤りとはいえなかった。東欧圏への旅行は、旅行社や学生旅行団体 ARTU の計画する団体旅行に加わらない限り、手続きその他全般にわたって、まだひどく厄介で、これらの国々は心理的にも物理的にもやはり西ベルリンからはひどく遠いところにある国だったのである。

数日後、私は西ベルリンにある日本総領事館を通じて、渡航先国追加の申請をした。追加国はさしあたりベルリンから一番近い東欧三国、ポーランド、チェコスロヴァキア、ハンガリーとした。そして領事館からこの申請を許可する旨の通知が来たのは、申込んでから三カ月余り経ってベルリンの秋もすっかり深まり、冬の近いことを感じさせ始めた十月も末の頃

であつた。

まず最初に私はポーランドへ行くことに決め、ヴィザをとり、ポーランド通商代表部を訪ねてみた。グルーネヴァルトの、緑に包まれた大邸宅街の一角にある、古ぼけてはいるが相当に大きくて立派な邸宅である。

窓口で私は無愛想なポーランド人の応待を受けた。

ワルシャワのほかにもダンツイヒにも行ってみたのだが、と私がいった時、男は木で鼻をくくるような調子で、今はダンツイヒとはいわないのだ、といった。では何というのでしようかと私が聞くと、彼は黙って手もとのメモ用紙を取ると鉛筆で何か書いて私の方によこした。——Gdańsk と書いてあつた。

所定の用紙をもらい、控室に行つて、必要事項を書き込むと、私はそれを持つて窓口へ行き差出した。するとさっきの男がポーランドに何泊するつもりかと聞く。ワルシャワに三泊、ダンツイヒに二泊と答えると、男は険しい目をして私を睨みつけ、ダンツイヒという町は存在しない、といった。私が慌ててポケットにつっこんださっきの紙片を取出し、グダンスクといい直した。

彼は機嫌を直したのかニヤリと笑つて、玄関の脇の小部屋に旅行社の者が詰めているから、その者からホテル券を五泊分買い込むように、そのホテル券の領収書を副えて書類を出せば、

ヴィザが下りるであらう、といった。

玄関の脇の小部屋に行くと、眼鏡をかけた五十歳前後の婦人が椅子に腰かけて新聞を読んでいた。旅行社の人かと聞くと、彼女はそうだと答え、新聞を置くと、机の上にある鞆の中から、早速ホテル券の冊子を取り出した。

ホテル券にはデラックスと一級、二級、三級の四種類あったが、私は二級を選んで五泊分の金額を払った。

そのホテル券の領収書にさっき書き込んだヴィザの申込用紙をつけて窓口に出すと、男は一つ一つの項目を検分したのち、よろしい、明日午前中に取りに来るようにといった。すぐにもらえるつもりでいた私はあてが外れた。私の住んでいるところからこのグルーネヴァルトまではバスに乗りづめで一時間以上もかかるのだ。そんなことをいわないで今すぐに発行してもらえないか、といって頑張ったが、効果はなかった。明日の午前中取りに来るよう、の一点張りである。西ベルリンにあるヘリオスという共産圏専門の旅行社にたのめば、ヴィザの入手からホテルの予約まで全部やってくれるのを知っていたのに、お膳立てされた旅行をするのが厭で私はこの厄介な手続きを単独で始めたのだった。そのことがかすかに後悔された――。

結局翌日改めて私は出直した。控室には先客がひとりソファ―に腰かけていた。二十二、三の、濃い口紅をつけた、目の強い美人である。

彼女は退屈しているのか、私に話しかけて来た。あなたを大学で見かけたことがある。どこから来たのか、何を勉強しているのか。私が簡単な自己紹介をすると、彼女も自己紹介をした。やはり自由大学の学生で専攻は生物学だが、学費を稼ぐために、旅行社に勤めて、ポーランド旅行者の世話をしている。今日もお客さんのヴィザの手続きを代行しに来たのだというのだった。

それではあなたはポーランドのことに詳しいでしょうと私は渡りに舟とばかりにたずねたが、彼女の答はポーランドには団体旅行の付添をして二回程行ったことがある程度なの、と至極覚束なかった。ポーランドで美しい町はどこでしようと思えば私がたずねると、彼女は首をかしげ、ワルシャワしか行っていないのです、といって考え込んでしまった。しばらくしてプレスラウの町は美しかったけれども、すっかり戦争で破壊されてしまったから、今は味気ないつまらない町になってしまったということだし、といってから、実は私の両親はプレスラウにいて、私はプレスラウに生れたのです、とつけ加えた。ではあなたはシュレージェンからの避難民というわけですね、と私がいうと、そうです、と彼女は答えた。今でもプレスラウには親類の者が何人かいるので近いうちに一度たずねてみるつもりなの。そういつてから彼女は秘密を打ち明けるように、私の母はポーランド人でドイツ人の父と結婚したのです、両親はもう亡くなってしまったけれども、といった。

その時彼女の名前が次の間の窓口から呼ばれ、彼女は立上った。

私は彼女の後姿を見送りながら、ふとこの夏休みに入って間もない頃大学の図書館で読んだあるドクター論文のことを思い出した。それは一九四八年の八月に受理されたもので、当時の物資の窮乏ぶりを物語る粗悪な仙花紙にタイプ印刷されてあったが、その筆者の女子学生もプレスラウ出身の避難民だったのである。その論文の前書にはこんなことが記されていた。この論文はプレスラウ炎上と共に焼けてしまった論文を記憶をたよりに再現したものである。ベルリン大学の特別の好意ある許可によってここに提出する。この論文を私はプレスラウで破壊された家の下敷となって死んでしまった両親、避難の途上不慮の死を遂げられた指導教官M教授、さらにベルリンに辿り着いてからの私を励ましてこの論文を再現する勇氣を与えて下さったK教授に捧げたい……。

持ち切れないように重ねられたパス・ポートの山を両手で抱えるようにして、さっきの女子学生が次の間から出て来た。彼女はそのパス・ポートを一旦テーブルに置き、小さなボストン・バッグに詰め直しながら、私に向っていった。今思いだしたのだけど、クラカウに行ってみるといいわ、焼けなかったから昔通りの町です。どんな町でしょうかときくと、彼女は微笑んで答えた。

「キョートのように古くて伝統的なポーランドの町です」

パス・ポートをボストン・バッグに全部詰め終ると、彼女は私に握手を求めこういつて立去った。

「さようなら、よい旅をね、私も一度日本へ行つて京都を訪ねたいと思っています」

それから三十分位して、漸く私の名前が呼び出された。

私の顔を見ると、窓口の男は証明書とヴィザの印を押してある私のパス・ポートの頁を示し、これでポーランドにはどの町でも五日間滞在出来る、といった。

クラカウという町の名前がポーランド読みかどうか自信のなかった私は、その町の名前を
いうのを控えてこう念を押した。

「グダンスクにもか？」

「そうだ」と彼はいった。

「グダンスクにも、クラクフにも、グロツアフ（ブレスラウのポーランド名）にもだ」

「ホテルはどうでしょう、すぐに見つかるとしようか」と私はきいた。

彼は首をすくめていった。「そんなことは旅行社に聞いてくれ」

玄関を出る時に、私は右手の小部屋に旅行社の婦人が詰めていることを思い出しホテルの事情を確かめるために寄つてみた。

彼女は私の質問に答えて、自信ありげにいった。今はシーズン・オフだから問題ない、ホテルは恐らくガラガラに違いないと。

まだ東独の通過ヴィザをもらう仕事が残っていた。翌日私は関門を通過して東ベルリンに入り、通過ヴィザを手に入れた。

西ベルリンの中央駅ツォー駅から乗ってワルシャワへ行ける汽車は一本しかなかった。七時三十九分にツォー駅を出てワルシャワグダンスク駅に十七時四十五分に着く、パリ発モスクワ行き急行列車である。

ポーランド通商代表部にヴィザをもらいに行った日から算えて四日目の朝、私はこの列車の客となった。

ポーランド国境までは三時間足らずであった。この旅行の手続きのために費やした時間のことを考えると、この時間は短か過ぎた。この四倍位の時間がかかってもしいいような気がするのだった。

国境では両方の国境で、つまりフランクフルト・アン・デア・オーダーで、東ドイツ側の、クノヴィスでポーランド側の検問があった。東ドイツ側の検問も、東ドイツから西ドイツに入る時のように厳重なものではなかった。ポーランド側の検問があったあと、オーピスというポーランドの国営旅行社の職員が兩替をしにまわって来た。私は兩替してもらったのち、この職員にワルシャワで二級に該当するホテルの名前を二つ教えてもらった。この男も、今ほどのホテルに行っても、部屋は空いている筈だと保証してくれた。

ワルシャワに着いた時は、もう日がとつぷりと暮れ、要心のため冬外套を着て来たのになう